

# がん検診のご案内

2024年4月現在

- ◆ 国民の2人に1人ががんになり、4人に1人ががんで亡くなる時代です。
- ◆ がん検診の目的は、がんを早期発見し、適切な治療を行うことにより、がんによる死亡率を減少させること。
- ◆ 厚生労働省では、がん検診の効果について評価を行い、科学的根拠に基づいて効果があると認められた5種類のがん検診を推奨。
- ◆ 検診の内容【胃がん・子宮頸がん・肺がん・乳がん・大腸がん】

厚生労働省においては、「がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針」（平成20年3月31日付け健発第0331058号厚生労働省健康局長通知別添）を定め、市町村による科学的根拠に基づくがん検診を推進。

## 指針で定めるがん検診の内容

種類	検査項目	対象者	受診間隔
胃がん検診	問診に加え、胃部エックス線検査又は胃内視鏡検査のいずれか	50歳以上 ※ 当分の間、胃部エックス線検査については40歳以上に対し実施可	2年に1回 ※ 当分の間、胃部エックス線検査については年1回実施可
子宮頸がん検診	問診、視診、子宮頸部の細胞診及び内診	20歳以上	2年に1回
肺がん検診	質問（問診）、胸部エックス線検査及び喀痰細胞診	40歳以上	年1回
乳がん検診	問診及び乳房エックス線検査（マンモグラフィ） ※ 視診、触診は推奨しない	40歳以上	2年に1回
大腸がん検診	問診及び便潜血検査	40歳以上	年1回

※がん検診を受診される方は、受診前にお読み下さい。



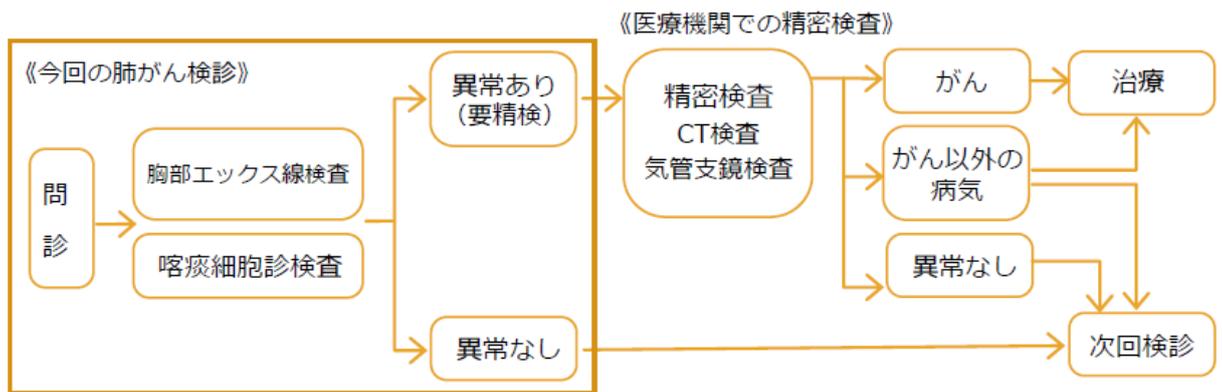
一般財団法人芙蓉協会 聖隷沼津第一クリニック  
聖隷沼津健康診断センター

# I. 肺がん検診

## ◆ 肺がんについて

- 日本人のがんによる死亡数の第1位は肺がんです。
- 肺がん発症の最大原因はたばこです。  
たばこの煙には約 70 種類の発がん物質が含まれており、肺がんをはじめ様々ながんを誘発しています。
- たばこは喫煙者だけでなく、喫煙者の煙を吸わされる人（受動喫煙者）にも害を及ぼします。喫煙者は禁煙しましょう。

## ◆ 肺がん検診の流れ



## ◆ 要精密になった場合

- がん検診で要精密（異常あり）と診断されたら、必ず精密検査を受診しましょう。
- がんを治癒するためには、早期発見・早期治療が有効です。
- 喀痰細胞診検査で要精密（異常あり）と診断された場合、もう1度、喀痰細胞診検査を受診しても意味がありません。

## ◆ 精密検査方法

- CT検査：  
寝台の上に寝た状態で、X線を使って身体の断面を細かく撮影します。
- 気管支鏡検査：  
口又は鼻から内視鏡を挿入し、気管や気管支の内腔を直接観察します。  
必要に応じて組織・細胞・分泌物などを採取し、がんであるかを診断します。

## ◆ 精密検査結果の取扱い

- 他の医療機関に精密検査を依頼した場合、検診実施機関がその精密検査の結果を共有することを個人情報の保護に関する法律（第23条第1～4項）の例外事項として認められています。

## ◆ 検診の利益と不利益

- 国が推奨するがん検診は、がん死亡率減少効果が科学的に証明された検査ではありますが、がんを100%見つけられるわけではありません。
- 発生したがんが見つかりにくい場所やがんの種類により発見できない場合もあります。（偽陰性）
- がん疑いと判定され、精密検査を受診してもがんでない場合もあります。（偽陽性）
- 自覚症状や初期症状が出にくい早期のがんを発見するためには、これらの不利益よりも、がんで死亡することを防ぐ利益の方が大きいのです。  
今後もうがん検診を定期的・継続的に受診して下さい。

## ◆ 検診機関からのお願い

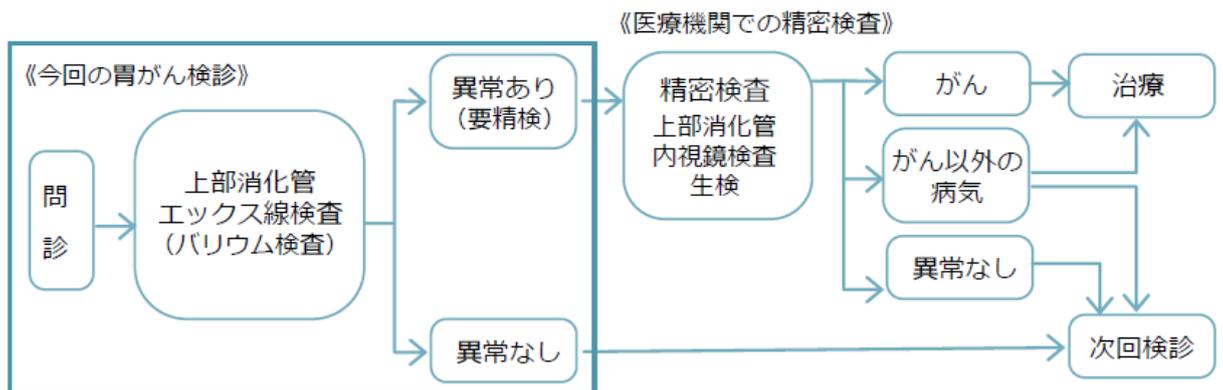
- 肺がん検診の結果にかかわらず、自覚症状（1ヶ月以上続く咳、持続性のある胸の痛み、痰が増えた、息切れしやすくなったなど）がある場合は、速やかに医療機関（呼吸器科）を受診して下さい。

## II. 胃がん検診

### ◆ 胃がんについて

- 日本人のがんによる死亡数の第3位は胃がんです。  
罹患数でも第3位のがんです。
- 胃がんの最大リスク要因はピロリ菌です。  
ピロリ菌は人の胃に感染して胃粘膜に住みつき、胃粘膜に炎症を引き起こさせる細菌で、胃潰瘍・十二指腸潰瘍・胃 MALT リンパ腫・突発性血小板減少性紫斑病などの病気にも関与しています。
- 塩分の過剰摂取や喫煙などもリスク要因に挙げられます。

### ◆ 胃がん検診の流れ



### ◆ 要精密になった場合

- がん検診で要精密（異常あり）と診断されたら、必ず精密検査を受診しましょう。
- がんを治癒するためには、早期発見・早期治療が有効です。

## ◆ 精密検査方法

- 上部消化管内視鏡検査（胃カメラ）：  
口又は鼻から細い管を挿入し、胃の中の粘膜を直接観察します。  
必要に応じて組織や細胞を採取し、がんであるかを診断します。

## ◆ 精密検査結果の取扱い

- 他の医療機関に精密検査を依頼した場合、検診実施機関がその精密検査の結果を共有することを個人情報の保護に関する法律（第23条第1～4項）の例外事項として認められています。

## ◆ 検診の利益と不利益

- 国が推奨するがん検診は、がん死亡率減少効果が科学的に証明された検査ではありますが、がんを100%見つけられるわけではありません。
- 発生したがんが見つけにくい場所やがんの種類により発見できない場合もあります。（偽陰性）
- がん疑いと判定され、精密検査を受診してもがんでない場合もあります。（偽陽性）
- 自覚症状や初期症状が出にくい早期のがんを発見するためには、これらの不利益よりも、がんで死亡することを防ぐ利益の方が大きいのです。  
今後もうがん検診を定期的・継続的に受診して下さい。

## ◆ 検診機関からのお願い

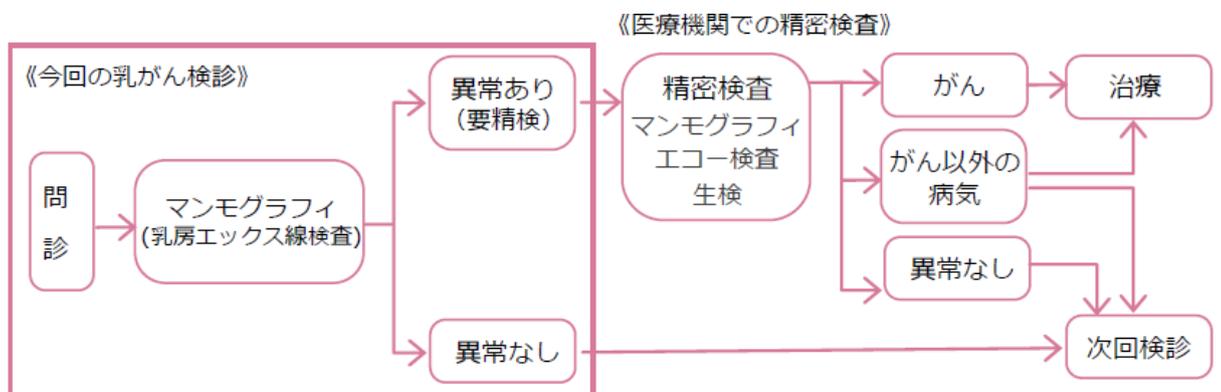
- 胃がん検診の結果にかかわらず、自覚症状（胃の痛み・不快感・違和感、胸やけ、吐き気、食欲不振など）がある場合は、速やかに医療機関（消化器科）を受診して下さい。

### III. 乳がん検診

#### ◆ 乳がんについて

- 女性のがんによる死亡数の第4位は乳がんです。  
罹患数では女性の第1位のがんです。
- 乳がんの主なリスク要因は女性ホルモンの1つであるエストロゲンです。  
乳がんの発生・増殖にはエストロゲンが深く関わっています。
- 乳がんの発症は30歳代から増え始め、50歳代でピークを迎えます。

#### ◆ 乳がん検診の流れ



#### ◆ 要精密になった場合

- がん検診で要精密（異常あり）と診断されたら、必ず精密検査を受診しましょう。
- がんを治癒するためには、早期発見・早期治療が有効です。

## ◆ 精密検査方法

### ➤ マンモグラフィ検査：

左右片方ずつ乳房を板で圧迫しながら、斜め方向や上下方向から撮影します。必要に応じてトモシンセシス撮影などを行いません。

### ➤ 乳房エコー検査：

乳房に超音波をあて、その反射波を画像にして乳房内部を観察します。

### ➤ 生検：

がんが疑われる箇所に針を刺して、組織や細胞を採取し、がんであるかを診断します。

## ◆ 精密検査結果の取扱い

- 他の医療機関に精密検査を依頼した場合、検診実施機関がその精密検査の結果を共有することを個人情報保護に関する法律（第23条第1～4項）の例外事項として認められています。

## ◆ 検診の利益と不利益

- 国が推奨するがん検診は、がん死亡率減少効果が科学的に証明された検査ではありますが、がんを100%見つけられるわけではありません。
- 発生したがんが見つけにくい場所やがんの種類により発見できない場合もあります。（偽陰性）
- がん疑いと判定され、精密検査を受診してもがんでない場合もあります。（偽陽性）
- 自覚症状や初期症状が出にくい早期のがんを発見するためには、これらの不利益よりも、がんで死亡することを防ぐ利益の方が大きいのです。今後もがん検診を定期的・継続的に受診して下さい。

## ◆ 検診機関からのお願い

- 乳がん検診の結果にかかわらず、自覚症状（しこり、乳房のひきつれ、乳頭から血性の液が出る、乳頭の湿疹やただれなど）がある場合は、速やかに医療機関（乳腺科）を受診して下さい。

## ◆ ブレスト・アウェアネスをご存知ですか？

- ブレスト・アウェアネスとは「乳房を意識する生活習慣」という意味で4つのポイントがあります。

- ①自分の乳房状態を知る
- ②乳房の変化に気をつける
- ③乳房の変化に気づいたらすぐ医師に相談する
- ④40歳になったら2年に1回乳がん検診を受ける

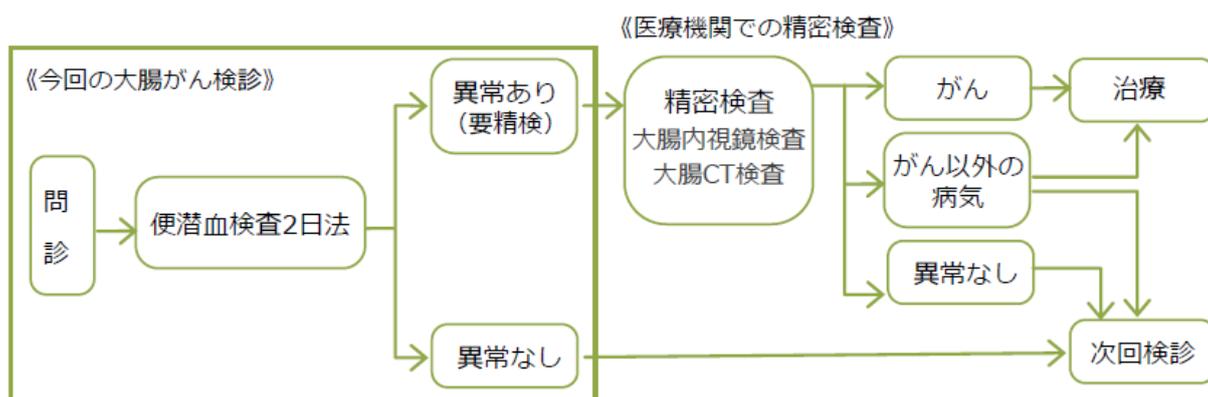
- ブレスト・アウェアネスは生活習慣の中で異常に気づくことを目的としています。
- 日頃から乳房状態に関心を持つことにより、変化を感じた際は医師に相談するという正しい受診行動を身につけましょう。

## IV. 大腸がん検診

### ◆ 大腸がんについて

- 日本人のがんによる死亡数の第2位は大腸がんです。  
罹患数では第1位のがんです。
- 大腸がんは増加傾向にあり、がんの中でも原因解明がもっとも進み、生活習慣との関係が明らかになっています。
- 赤肉（牛、豚、羊など）や加工肉（ベーコン、ハム、ソーセージなど）の摂取、飲酒、喫煙、体脂肪の過多、腹部の肥満などによりリスクは高まります。

### ◆ 大腸がん検診の流れ



### ◆ 要精密になった場合

- 便潜血検査で陽性（異常あり）と指摘されたら、必ず精密検査を受診しましょう。
- がんを治癒するためには、早期発見・早期治療が有効です。
- 痔からの出血だろうと自己判断しないで下さい。
- 便潜血検査で陽性（異常あり）と診断された場合、もう1度、便潜血検査を受診しても意味がありません。

## ◆ 精密検査方法

- **大腸内視鏡検査：**  
肛門から内視鏡を挿入し、大腸の内腔を直接観察します。  
異常があれば、組織検査やポリープ切除を行います。
- **大腸 CT 検査：**  
CT を使って腹部の仰向け状態とうつ伏せ状態を撮影します。  
コンピュータ処理により、大腸の内腔画像を作成して大腸内に異常がないかを診断します。  
内視鏡を挿入しないので、組織検査やポリープ切除はできません。

## ◆ 精密検査結果の取扱い

- 他の医療機関に精密検査を依頼した場合、検診実施機関がその精密検査の結果を共有することを個人情報保護に関する法律（第 23 条第 1～4 項）の例外事項として認められています。

## ◆ 検診の利益と不利益

- 国が推奨するがん検診は、がん死亡率減少効果が科学的に証明された検査ではありますが、がんを 100% 見つけられるわけではありません。
- 発生したがんが見つけにくい場所やがんの種類により発見できない場合もあります。（偽陰性）
- がん疑いと判定され、精密検査を受診してもがんでない場合もあります。（偽陽性）
- 自覚症状や初期症状が出にくい早期のがんを発見するためには、これらの不利益よりも、がんで死亡することを防ぐ利益の方が大きいのです。  
今後もがん検診を定期的・継続的に受診して下さい。

## ◆ 検診機関からのお願い

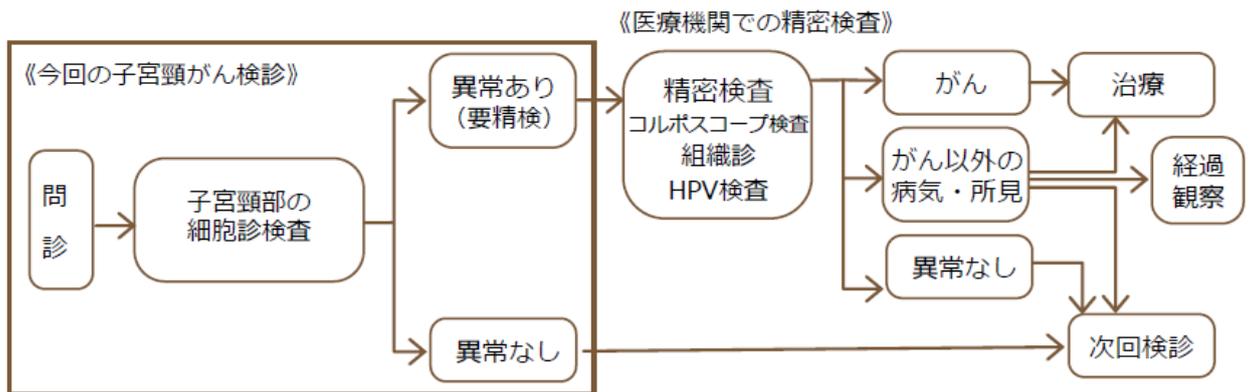
- 便潜血検査の結果にかかわらず、自覚症状（血便、下血、下痢と便秘の繰り返し、便が細い、排便後の残便感、お腹が張る、腹痛、貧血、体重減少など）がある場合は、速やかに医療機関（消化器科）を受診して下さい。

## V. 子宮頸がん検診

### ◆ 子宮頸がんについて

- 子宮がんには子宮頸がんと子宮体がんの2種類があります。
- 子宮頸部がんは子宮頸部の入り口である外子宮口あたりに発症することが多く、増殖のスピードが遅いため、検診で早期に発見できるがんです。
- 子宮頸がんは20歳代の若い世代でも罹患率が高く、増加傾向のがんです。  
主なリスク要因はヒトパピローマウイルス（HPV）の感染です。
- 子宮頸がんは初期の自覚症状はほとんどありません。  
月経と無関係な出血（不正出血）・下腹部の痛み・異常なおりものが増えるなどの自覚症状がありましたら医療機関を受診しましょう。

### ◆ 子宮頸がん検診の流れ



### ◆ 要精密になった場合

- がん検診で要精密（異常あり）と診断されたら、必ず精密検査を受診しましょう。
- がんを治癒するためには、早期発見・早期治療が有効です。

## ◆ 精密検査方法

- コルポスコープ検査と組織診：  
肉眼ではわかりにくい部分を拡大鏡（コルポスコープ）で観察します。  
その際、疑わしい部位の組織があれば、採取して検査（組織診）します。
- HPV 検査：  
子宮の入り口の細胞を採取して、子宮頸がんの原因となるウイルスの有無を調べます。

## ◆ 精密検査結果の取扱い

- 他の医療機関に精密検査を依頼した場合、検診実施機関がその精密検査の結果を共有することを個人情報保護に関する法律（第23条第1～4項）の例外事項として認められています。

## ◆ 検診の利益と不利益

- 国が推奨するがん検診は、がん死亡率減少効果が科学的に証明された検査ではありますが、がんを100%見つけられるわけではありません。
- 発生したがんが見つけにくい場所やがんの種類により発見できない場合もあります。（偽陰性）
- がん疑いと判定され、精密検査を受診してもがんでない場合もあります。（偽陽性）
- 自覚症状や初期症状が出にくい早期のがんを発見するためには、これらの不利益よりも、がんで死亡することを防ぐ利益の方が大きいのです。  
今後ともがん検診を定期的・継続的に受診して下さい。

## ◆ 検診機関からのお願い

- 子宮頸がん検診の結果にかかわらず、自覚症状（生理以外の不正出血、閉経後の出血、生理不順など）がある場合は、速やかに医療機関（婦人科）を受診して下さい。



## ◆ 子宮体がんについて

- 子宮体がんは子宮内膜がんとも言われ、子宮の奥にある体部の内側の子宮内膜に多く発症し、閉経前の発症は少ないとされています。
- 子宮体がんは閉経以降にリスクが高まるため50～60歳代に多く、増加傾向のがんです。  
主なリスク要因は女性ホルモンの1つであるエストロゲンです。
- 子宮体がんの症状自覚症状として、月経異常（過多月経、不規則月経）・月経とは無関係な出血（不正出血）・閉経後に少量出血が長く続く・異常なおりもの（褐色など）が増える・排尿痛・排尿困難・性交時痛・骨盤領域の痛みなどがありましたら、医療機関を受診しましょう。